

パリ 2024 国際反五輪ウィークエンドと
大会関連施設・近隣地域への影響に関するフィールドワークの報告
期間：2022 年 5 月 21 ~24 日

文責：井谷聡子

5 月 21-22 日： 国際反五輪ウィークエンド



〈5 月 21 日〉 1 日目 国際反五輪ミーティング

2024 年パリ五輪大会に関連して多くの開発が行われているサンドニ（Saint-Denis）に立地するパリ第 8 大学（Université Paris 8 Vincennes-Saint-Denis）にて、国際反五輪ウィークエンドの初日、国際反五輪ミーティングが開かれた（その時の呼びかけ文は最後のページに記載）。主催は、現地で反五輪運動を続ける Saccage 2024（Saccage は「破壊」というニュアンス）。このイベントには、過去・将来のオリンピックの開催地と招致に取り組んでいる都市から活動家や研究者、そして現地で五輪問題に関心を持った学生の組合員たちが集まった。

このイベントには過去の開催地であるソチ、リオデジャネイロ、東京と将来の開催予定都市であるパリとロサンゼルス、この時点で招致活動が続いていたピレネー・バルセロナ、そして見事に招致活動をストップさせたハンブルグからの報告があった。この会議の直前にピレネー・バルセロナで 5000 人もの人が反対デモに参加したというニュースがあり、少人数での運動ながら、五輪反対の声を IOC、そして世界に向けて発信したピレネー・バルセロナの活動家たちに祝福するメッセージが送られていた（その後、6 月 21 日にスペイン・オリンピック委員会が招致を断念すると発表）。

井谷は 1 日目朝にパリに到着するフライトで向かったため、午前の部の途中から参加することになった。東京から預かった反五輪トーチや反 Tokyo2020 運動関係のグッズが詰まったスーツケースをゴロゴロ転がして現場に到着した時には、すでに午前の部のテーマであるオリンピックとグリーンウォッシングについて議論が始まっていた。会場は半円形にひな壇になった大学の講義室。登壇者の背後には、“On veut pas de competition（競争はしない）”、“On veut la revolution（求めるのは革命だ）”と書かれた横断幕が掲げられている。

プログラムは以下の通り

- | | |
|---------------|---|
| 10:30-12:00 : | エコロジーの破壊とオリンピック・グリーンウォッシング：次の「史上最もグリーン」な大会は止められるか |
| 13:30-14:30 : | Saccage 2012-2028：人々の生きられた経験と過去・将来の大会によって引き起こされた破壊を振り返る |
| 15:00-16:30 : | オリンピックと警察：大会が人口のコントロールをセットし試験する場に利用される |
| 17:00-18:30 : | 反五輪の闘い：過去の抵抗運動から学べることは？ |



写真1 過去・未来の五輪都市から報告が続きます。ボイコフさんも参加



写真2 会の最後に反五輪トーチを手渡してきました

〈5月22日〉 2日目：Toxic Tour/有毒ツアー

パリ市中心部から北東部に12.4kmの位置にあるコミュン、ダグニー（Dugny）にあるラエール・デ・ヴァン公園（Parc de L'aire des Vent）の2024年大会用メディア村建設現を視察。ラエール・デ・ヴァン公園はその東北をル・ブルジェ空港に面する広大な緑地公園である。現在その緑地を一部を閉鎖し、SOLIDEO（パリ2024年オリンピック会場設立委員会）が6.5ヘクタールに及ぶ緑地の開発工事を進めている（写真1）。



写真3 メディア村建設のクレーンが立ち並ぶ

ここでは毎年フランスの共産党機関紙である『リュマニテ』のための資金を集める「ユマニテ祭（Fete de l'Humanite）」が開かれ、フランスで最も多く人が集まる祭りとしても知られる。この公園にSolideoは世界から集まるメディア関係者が700人滞在できるメディア村を建設する予定。しかし、この公園が位置するセヌ=サン=ドニの住民の一部は、この開発工事は環境破壊、汚染、貧しい住民の追い出し、不動産の投機を加速させるだけで、周辺住民にとっての利点がないと抗議する。



写真4 メディア村の開発計画を説明する看板

メディア村の反対側には、ジョルジュ・ヴァルボン県立公園（Parc départemental Georges-Valbon）がある。こちら415ヘクタールの広大な公園で、44種の野鳥、貴重種のカエルが生息する湿地や湖、滝、スポーツのできる芝生のエリアなどがある。この公園と先述のラエール・デ・ヴァン公園の間にダグニー・ラ・クールヌーブ駅（Dugny-La-Courneuve）が新たに建設されたが、これに伴い希少な爬虫類のいくつかの種が危機に晒されている。また、このエリアはかつて化学薬品などの工場や軍隊の基地があった場所で土壌汚染が深刻。今回の大会のために浄化を行うと自治体は述べてきたが、採用されている方法に問題があり、汚染土の掘り出しによる近隣地域への汚染物質の流出、広がりが懸念されている。

またこの日の午後は、今回現場を案内してくれたパリ2024年オリンピック大会に反対しているSaccageのメンバーが、ここで「カウンター・オリンピック」という、オリンピックとは異なる身体文化のイベントを開き、ピクニックをしながらオリンピック開発の問題点についてさらに説明を加えてくれた。



写真5 カウンターオリンピックゲーム



写真6 パリの反五輪マスコット、のハリネズミ。足元には小さな虹色のユニコーンが。



写真7 メディアセンターを視察していたら警察がずっとついてきた

5 月 23、24 日関係施設フィールドワーク

5 月 23 日 選手村建設現場

パリ市郊外のサン＝ドニ（Saint-Denis）、イル＝サン＝ドニ（Ile Saint-Denis）、サン＝ウアン（Saint-Ouen）の 3 コミューンにまたがる 51 ヘクタールのエリアが選手村の用地として建設が進められている。24 年大会までには近郊電車（PER）2 線と地下鉄 5 線が乗り入れる巨大なハブ駅が建設される予定。選手村は大会後にコンドミニアムとして販売される予定で、8000 人もの人々が居住できると宣伝されている。サン＝ドニを含むパリ北東部のエリアは、貧困地区として知られ、特にアフリカ系、中東系移民が多く住み、場所によっては白人住民の姿をほとんど見かけないところもある。24 年大会はこうしたパリ郊外の貧困地区の再開発が主要な目的として掲げられている。しかし、選手村が改築されて提供されるコンドミニアムの価格は、この近隣住民の多くは手が出ない価格となることが予想され、大会後に選手村のエリアに住む 8000 人の人口はこの地域の人口構成を大きく変えることになる指摘されており、典型的なオリンピックを通じたジェントリフィケーションである。また、この巨大な開発計画を 24 年までに終了されるために特別の工事許可が出されており、夜間の工事に対して住民からの苦情が出されている。

さらに、この選手村とメインのスタジアムを繋ぐ高速道路のアクセスを向上するために、新しい高速道路の出口が建設されているが、その道が幼稚園と小学校のすぐ真横を通る形で進められている。その学校に自身の子供が通っている住民は、その工事と出口完成後に増加する交通量の大幅増加による騒音と大気汚染に抗議して、工事の中止を求めているが、聞き入れられていない。環境アセスメントでは、この工事により学校用地としては許容範囲を超えるレベルの汚染が発生することが判明しているが、裁判所は高速出口ではなく学校の移転を提案している。しかし、近隣住民にとっては学校の移設は送迎の負担が増加する懸念もある。この学校の校庭で遊んでいる子供たちはほぼ全員非白人の子供たちであった。貧困地域の学校の環境が軽視されている点について、自治体並びに SOLIDEO によるレイシズムを指摘する声もある。



写真 8 見渡す限りの広大な土地で選手村の建設が進む



写真9 学校（左）のすぐ横で行われている大規模な高速道路出口の建設工事



写真10 高速道路出口が真横に通る事になる家の壁には環境悪化を懸念した皮肉たっぷりの抗議文が



写真11 2024年大会のメイン会場となるフランスの国立競技場、スタッド・ド・フランス（Stade de France）

5月24日 オーヴェリビリエ労働者菜園（Aubervilliers Workers' Garden）

パリ郊外のオーベルヴィリエ（サン＝ドニに隣接）にあるオーベルヴィリエ要塞を半分取り囲むようにある7ヘクタールの区画は、ヴェルトゥス労働者の庭園と総称され、85年以上にわたってガーデナーたちの手により維持されてきた。フランドルスへの道を守っていた旧五角形の砦のふもとにある耕された土のオアシスである。第二次世界大戦後、国家が労働者階級の不安を払拭することを目的に建てられた美しい緑地は、1935年に正式に設立され、それ以来、歴史的に恵まれない地域にまれで美しい隠れ家を提供してきた。しかし、この区画の1/3にも及ぶエリアを使って2024年大会のアクアティクス・センター（競泳用プールが入る）の建設が計画され、工事が進行している。

この日は、この工事に反対する運動を担ってきたドリハスさんとマリアさんによる案内があり、菜園の中に入ることができた。中は小さな区画に分けられ、多くのガーデナーたちが思い思いに季節の野菜や果物、花を育てている。中に植えられているイチジクやさくらんぼの木はどれも大きく実り豊かで、この菜園の長い歴史を感じさせるものだ。しかし、その菜園の片側は工事の白いフェンスによって仕切られており、その反対側ではアクアティクス・センターの工事の音が響く。

この工事に反対するオーベルヴィリエのガーデナーたちは、2021年7月から2ヶ月にわたり工事を阻止するための占拠活動を繰り返し続けたが、同年9月までに追い出された。しかし、その後工事の違法性をめぐる裁判では、この工事がフランスの環境法に抵触しているという判決が出され、工事現場の一部は菜園に戻すよう命令が出た。占拠していたガーデナーが菜園から追い出されてから2時間ほどの間にブルドーザーを入れて再演を潰しており、裁判所の判断が出る前に菜園を潰す計画であったことが明らかとなった状況である。

裁判所の判断により、プールは当初の計画よりも菜園の反対側、駐車場のところに作ることであり、その横にガーデンを作ると行政側は述べているが、パブリックにはアクセスできないことになる。現在は既に完全に土壌が削られ、農地としての姿は跡形もなく、菜園に戻される気配もない。また実際に菜園に戻すために土を作るには多く年月を必要とするため、この工事のために菜園を失ったガーデナーたちの喪失感は大きい。

この状況について、ガーデンそのものがジェントリファイされている状況であると視察に参加した米国の研究者は指摘する。また、オリンピックプールは他の施設と同様にこの地域のジェントリフィケーションの一部でしかない。ここは貧困地域で、周囲にはパブリックハウジングがほとんどである。アクアティクス・センターへのアクセスを口実として新しいメトロラインを増やされ、富裕層の住民をこのエリアに呼び込む計画である。この地域に新たに作られているハウジングの売りは、「パリの北の安いエリアに住んで、スポーツするところがあって、仕事のあるエリアに15分で通勤できる」である。



写真12 アクアティクス・センターの建設計画を掲示する看板。裏側が工事現場



写真13 写真手前からフェンスで囲まれているエリアまでは工事の違法性が認められ、菜園に戻す命令が出されているが、菜園修復が進められている様子は見受けられない。



写真14 フェンスの内側には様々な野菜や花、果樹が育っている



写真15 "Nous sommes la nature qui se defend" (私たちは自然を守る者)



写真16 "Jardiner C'est Resister" (ガーデニングは抵抗)



写真2 マリアさんの菜園小屋。中には素敵な装飾と抵抗のアート、外壁には抵抗の詩

マリアさんの小屋の壁に書かれていた詩（一部判読できず）

“En sauvent de ta Plaine agricole des vertus 美德の農業平原を守る
 Sauvons la Vie Du Sol Contre Pe Beton コンクリートから土の命を守
 ☹ Non Au Solarium ソラリウム禁止
 Vive les potagers 菜園万歳
 Au lieu de les saccager 破壊するのではなく
 Laissez nous jardiner ガーデニングをさせて
 Dans otte oasis as ... 美德、活力に満ちた
 Vertus, pleine d'énergie” ...オアシスのようなこの場所で



写真3 マリアさんの小屋の中
 “Chassez la haine offrez ‘des roses”（憎しみを追い払い、バラを捧げる）



写真16 マリアさんの畑から甘い苺とエンドウを頂きました

「反オリンピック国際集会 2022 年 5 月 21-22 日にセヌ＝サン＝ドニで会おう」

Posted on 14 février 2022 by saccage2024

<https://saccage2024.noblogs.org/archives/1516>

.....

ロンドンで私たちは、500 名以上の入居者を抱えていた英国最大の特定目的住宅協同組合、クレイズレーン団地が破壊されるのを見た。そして、たくさんのジャガイモやアーティチョークやカリフラワーが植えられていたマナー市民菜園（Manor Garden Allotments）が破壊されるのを見た。

ソチで私たちは、ソチ国立公園の広大な土地が破壊されるのを見た。そこは手付かずの国有森林保護地区だったが、無人の地に新都市を建設するため開発された。

リオで私たちは、ヴィラ・アウトドロモが破壊されるのを見た。オリンピックパークの端っこに位置する、数十年の歴史を持つその漁村には 800 世帯が住んでいた。2016 年までにリオで強制退去の憂き目にあった 22,000 世帯に、その 800 世帯は含まれている。また、私たちは、戦車がやって来てファベールの公有地を篡奪するのを見た。自然保護区がゴルフコース建設のために売り飛ばされるのを見た。

ピョンチャンで私たちは、スキー場建設のために 500 年の歴史を持つ神聖なカリワン山の森林保護区域が破壊されるのを見た。

東京で私たちは、霞ヶ丘アパートが破壊されるのを見た。そのアパートは 1964 年の東京オリンピックの際に立退を強いられた住民の移転先となった公営住宅だった。

北京で私たちは、乾燥した山間部に人工雪を降らせるために貴重な水資源が奪われるのを見た。この地域に確立されたウィンタースポーツ産業は、将来にわたり資源を吸い尽くしていくだろう。

ミラノ・コルティナで私たちは、東アルプスが破壊されていくのを見ている。ユネスコ・ドロミテ財団が罪深くも沈黙を守っているのをよいことに、オリンピックが次第に環境破壊の機会となっている。

ロサンゼルスで私たちは、エコパークレイクの破壊をすでに見ている。この公園でテント生活をしていた 200 名もの人々が暴力的に排除され、公有地の囲い込みと軍事化が進行した。

そして、私たちは、ロサンゼルスに現存する数少ない黒人地区、イングルウッドが破壊されていくのを見ている。新しく建設されるスタジアムが家賃を高騰させ、地域経済を破壊し、環境汚染を撒き散らしている。

私たちは、オリンピック開催の旗の下、公共空間、緑地、住宅、コミュニティが破壊されるのを何度も見てきた。

これらの怒りをそれぞれの都市でおのおのが孤独に抱えておくにはあまりに荷が重すぎるので、世界中の仲間たちがパリにやってくる。私たちの中には家を失った人がいる。生活基盤、コミュニティ、権利を失った人もいる。私たちがパリに集まるのは、未来に向けて力を蓄えるため、それぞれの経験に耳を傾ける必要があるからだ。国際オリンピック委員会（IOC）とオリンピック推進派は、国境を越えて組織されている。連中を止めるには、私たちもそうする必要がある。こうした会議を実現させるために労力を費やすことで、私たちは明白なメッセージを送ることになる。私たちはこの闘争にコミットしており、運動に加わるあらゆる人と連帯している、と。私たちを局所の闘争に孤立させ、孤独な闘争へと私たちを閉じ込めようとするのは、資本家階級のお馴染みの手口だ。彼らにとって最大の脅威が、私たちが互いに力を合わせて闘うのを選ぶことであると、私たちは知っている。それぞれの都市においてだけでなくオリンピックそのものに有意義かつ力強い方法で抵抗する、いかなる戦争機械を私たちは作ることができるだろうか？

パリ五輪組織委員会是这样言っている。「われわれは過去大会の問題に気づいており、パリ大会はこれまでとは異なり、簡素化された控えめなモデルを提供します」。パリ市長是这样言っている。「より環境への配慮が行き届いた制度への移行をオリンピックは加速させます」。フランスでは少なからずの人がこうした言葉を鵜呑みにし、パリ 2024 は「史上最も環境に配慮した大会」になるだろうと信じた。このことは、少なくともある程度は、パリの人々がボストン、ハンブルグ、ブダペストで五輪招致を拒否した人々の後に続かなかったことの説明となっている。

しかし大会を 2 年後に控えた今日、こうした約束は維持不可能な幻想となった。

私たちは、ADEF という非営利団体がサン＝トゥアン市で運営していた労働者向け住宅が、選手村のために破壊されるのを見た。現在のところ、全員が移民労働者である元入居者たちは狭い仮設住宅に押し込められ、次にどこに行くことができるかわからないままにいる。

私たちは、レール・デ・ヴァン公園が破壊されるのを見た。保護区域となっている生態的回廊の一部である県立公園に、「メディア村」建設のためコンクリートが流されるのである。その必要性には IOC すらも疑問を挟んでいた。

私たちは、オーベルヴィリエの労働者菜園が破壊されるのを見た。ロンドンのマナー市民菜園同様、コンクリートの下に土壌が消えてしまうのだけど、それは大会に使用されることすらない「練習用」プールのためなのである。

タヴェルニーとサン＝ルー＝ラ＝フォレでは、目下完璧に機能している二つのプールを取り壊してオリンピックサイズのプールが建設される。シャン・ド・マルス公園では、また別のオリンピック関連プロジェクト（グラン・パレ・エフェメール）のため緑地がコンクリートに変貌した。エランクールでは、マウンテンバイク競技のために木が伐採されることになっている。

私たちは認めなくてはならない。パリ五輪はこれまでと異なる五輪などではない、と。少数の人たちにとっての好機、市井の人たちにとっての災厄。利益の民営化、負債の国有化。近年の大会と比べれば、パリ五輪は範囲や規模においていくらか小さいかも知れないが、オリンピックが開催地にもたらすものは何処も変わらない。

2022 年 5 月 21、22 日に、パリ近郊で反五輪国際ウィークエンドが開かれる。イングランド、ロシア、ブラジル、日本、米国からの参加者が出席し、各自の視点と経験を共有する。土曜日（21 日）にはパリ五輪に伴う都市「再生」プロジェクトの中心近くで集会が行われる。日曜日（22 日）にはラ・クールヌーヴやオーベルヴィリエのオリンピック災害を被った土地を訪れ、共同で闘争の準備をする。この国際集会は、過去の経験から学ぶこと、そして何よりもこうしたオリンピック災害に抗って闘うことを望むあらゆる人に開かれている。

オリンピックを廃止するための戦いは無益である、と信じる人々がいることを私たちは知っている。昨年夏の「パンデミック・ゲーム [=東京五輪]」に対しては、日本人の 8 割が反対していたにもかかわらず強行開催され、その後日本では記録的な感染拡大が起こったのである。COVID にすらオリンピックが止められないなら、誰に止めることができるだろう？

他にはこう考えている人々もいる。仮にオリンピックを止めたところで、もっと広範に及ぶ資本主義の構造は破壊をもたらし続ける、と。オリンピックは石油や銀行とは異なる。オリンピックの消滅だけではこの腐敗した世界秩序の中枢に打撃を与えることはない。

でも考えてみてほしい。直近の開催国のほとんどの人々に嫌われ、いかなる意味においてもエッセンシャルとは言えない運動会すらなくすことができないとしたら、どうやって石油や銀行のない世界を夢見ることができるだろう？

IOC は困難の中にある。日本人の 8 割が東京大会に反対する前、リオ大会ではブラジル人たちが路上に出て「排除のゲーム」を非難した。2013 年以降、開催候補地が招致の是非を問う住民投票を行えば、答えはつねに「NO」である。IOC に 10 億ドル以上も払っているアメリカのテレビ局、NBC は視聴率急落のために東京大会の後で広告主に補償を行う羽目になった。

これは勝算のある闘いだ。開催を希望する都市がなくなればオリンピックは終わる。それが可能に思えるなら、このプロセスを加速させない理由があるだろうか？ 私たちにはまだ、札幌やピレネー＝バルセロナ（スペイン）を 2030 年冬季五輪から、プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地方を 2034 年冬季五輪から救うことができる。

5 月に会おう。みなさんと会えるのを楽しみにしている。今後関連情報は以下で発信される：

ウェブサイト：<https://saccage2024.noblogs.org/>

SNS：@saccage2024（Twitter：@2024saccage）

連絡先：saccage2024@protonmail.com（フランス語、英語に対応可能）